

この発表の目的は葛根廟事件の生存者である大島満吉さんの体験談を伝えることです。

- ◆初めに葛根廟^{かつこんびょう}事件の背景である『満蒙開拓』について、地図を見ながら少し触れます。
- ◆そのあと、12枚の挿絵を用い、紙芝居形式で大島さんが話されたことを伝えます。

大島満吉さんの体験を聞く会

2024/6/9(日)13:30－16:30

飯田橋セントラルプラザ『ヒロシマ講座』にて

大島満吉氏（2024年6月時点88歳）事件当時9歳

3歳の時に群馬県新治村（現、みなかみ町）より渡満。

父は大工だった。練馬区在住。

単行本『流れ星のかなた 葛根廟事件からの生還』大島満吉（著）2024年4月発行



満蒙開拓:興安三事件

① 葛根廟^{かつこんびょう}事件

1945年8月14日、葛根廟（興安4省の省都、興安から南東35キロほどに位置）に向かっていた日本人避難民千数百人がその付近において中国人やソ連兵の攻撃を受け、虐殺や自決により、千人ほどが亡くなり、百数十人が生き残ったのみだった。

② 東京荏原開拓団 武蔵小山商店街

興安地域の白城子方面に向かって避難を開始し、双明子の麻畑でソ連軍に襲撃された。

8/17虐殺 約1,000名死亡 生存者約400人。

③ 仁義佛立講^{じんぎぶつりゅうこう}開拓団

東京市材木町（現在の六本木）にあった乗泉寺の一般信徒

8/25虐殺 約400名～700名 生存者は20名ほどといわれている。

竜江省とう南県西方20kmの地点（白城市近辺）でソ連軍の自動車化歩兵部隊と遭遇した。

満蒙開拓団:東京から11,000名

東京の満蒙開拓民数は全国で第9位。11,111人（開拓団9,116人、義勇軍1,995人）

前期の1932年～39年頃は、都市に流入してくる労働者の失業対策としておこなわれた。

後期1939年～1945年は都市の商業者の転業、失業対策、戦火から逃れるための疎開という側面が強くなった。仏教やキリスト教など宗教団体の開拓団が組織され、鏡泊学園（国士舘大学の前身）、東京農大などの開拓団がつけられた。

満洲に渡った開拓民

農業移民(約27万人) 開拓団数(約800)
満蒙開拓青少年義勇軍(約8万6千人)
試験移民(武装移民、1932年～)…農業経験のある在郷軍人。
分村・分郷移民(1937年～)…農村からの集団移民。
満蒙開拓青少年義勇軍(1938年～)…15～18歳の青少年。
自由移民…国や県、市町村募集以外。
勤労奉仕隊…農閑期の春から秋の数ヶ月に派遣。
帰農開拓団…農業以外の職種から満洲に移住し、農業に転業。

土地収用に抵抗する地元農民を強制的に囲い込み、彼らの農地を「無人地帯」に指定、約2000万ヘクタールを安価に買い上げ、入植地とした。

満洲国は日本の外地(本土の延長)ではなく、日本政府が承認した外国であったが、移民たちは日本国籍のまま日本人社会の中で生活していたため、日本人という意識が強く、現地住民と交流する事はあっても同化はしなかった。

満蒙開拓青少年義勇軍は「兵士予備軍」という位置づけで、農業実習とともに軍事教練を課され、軍事的観点から、主にソ連国境に近い満州北部に入植させられた。42年以降、戦局の悪化に伴う兵力動員で成人男性の入植が困難となり、青少年義勇軍が移民の主軸となった。

満蒙開拓がもたらしたもの

- 現地住民の犠牲…多数が土地を追われ、生活を奪われ、亡くなった。
 - ▶ 土龍山事件(依蘭事変)…1934年3月9日、土地収用に対して起きた現地住民による武装蜂起。5月20日、関東軍が鎮圧。
- 開拓民の犠牲(約8万人)…栄養失調、発疹チフス等の伝染病、ソ連軍による虐殺、現地民による襲撃、沖縄戦より多い集団死
 - ▶ 麻山事件…1945年8月12日、ソ連軍と現地民に追い詰められた哈達河開拓団の421人が自決。
 - ▶ 葛根廟事件…8月14日、興安街でソ連軍戦車部隊が1000人以上を虐殺。
 - ▶ 高橋事件…8月17日、暴民に襲われた高橋開拓団の約300人が呼蘭河に投身自殺。
 - ▶ 鳳凰事件…8月24日、ソ連軍と暴民に追いつめられた鳳凰開拓団216人が自決し、全滅。
 - ▶ 佐渡事件…8月27日、佐渡開拓団跡地にたどり着いた避難民が、ソ連軍の偵察機を焼き、トラックに対する射撃の報復として1400人以上が殺害される。
 - ▶ 亜州事件…8月27日、暴民に襲われた亜州白山郷開拓団の365人が自決。

- ▶ ^{とんか}敦化事件…8月27日、ソ連軍によって集団レイプされ続けていた日満パルプ敦化工場の女性社員や家族30余人が青酸カリで集団自決。
 - ▶ 瑞穂事件…9月17日、瑞穂開拓団の495人が服毒自殺。
 - ▶ 黒川開拓団…西隣の来民開拓団270人が集団自決し、保護と引き替えにソ連軍将校に未婚女性による「性接待」を提供。
 - シベリア抑留(約57万5千人、うち約5万8千人が死亡)
 - 残留婦人、残留孤児
 - … 永住帰国者、2万余人 …いまだに祖国に帰れぬ残留者たち、終わらぬ肉親さがし
 - 帰還者たちに対する「満州帰り」「満州乞食」という侮蔑→ 再び国内の開拓地へ
 - 拒まれる遺骨収集、慰霊
-

引揚げ者 & 永住帰国者数

- ▶ 前期集団引揚げ (ソ連は日本人引揚げに関心なく、日本政府はアメリカ軍に依頼した)
1946年5月～1948年8月 105万人
敗戦翌年から中国の内戦が激しくなって中断するまでの2年3カ月
 - ▶ 後期集団引揚げ
1953年3月～1958年7月 3万3千人
中華人民共和国建国(1949年)後の1953年(朝鮮戦争の休戦)から
 - ▶ 国交正常化(1972年)以降の国費永住帰国者の数(2023年12月31日現在)
「中国残留孤児」2,557名
「中国残留婦人等」4,168名 一緒に帰国した家族を含めると 総数20,912名
-

興安総省について

- ▶ 終戦時の満州の総人口 (満人、華人、モンゴル人など合わせて5,000万人)
- ▶ 日本人人口(軍人を除く) 155万人 死亡者20万人 (4割が開拓民)
- ▶ 日本からの開拓団民27万人 (5,000万人の0.5%ほど)
- ▶ 1937年から1945年。このうち、約8万人が死亡
- ▶ 日本人の10%が国策で渡った人々だった。興安総省には4つの省があった。
- ▶ 興中地区、興北地区、興東地区、興南地区
- ▶ 省都は興安街(別称は王爺廟ワンヤミョウ) 人口3万人
(=現在のウランホト市 50万人) 興安は中国語読みでシンアン、満洲語読みでヒンガン
- ▶ 日本人は一割ほどの3,000人で、軍関係者が約300名、他が民間人。

- ▶ 日本が興安の4つの省を支配していた。
- ▶ 興安総省は現在の中華人民共和国内モンゴル自治区ヒンガン盟

ソ連軍の侵攻

- ▶ 8月9日未明にソ連軍が満洲国、朝鮮半島、樺太などに侵攻を開始した。
- ▶ 8/11 午後4時過ぎにソ連軍の飛行機が空中から爆撃を始めた。
- ▶ 翌8/12に戦車や機械化部隊が続々と南下してくる轟音が聞こえてきた。
- ▶ 8/14には、暴徒と化した現地民が人々を包囲し、最初の犠牲者が出た。

避難の開始

- ▶ 1班：興安街の西半分(軍官学校職員家族)・・・10日から出発し始め、11日午前中には最後の貨物列車に乗って全ての出発を終え、無事脱出に成功した。東側住民や開拓団には出発を知らせなかった。※ 約1,200名
- ▶ 2班：浅野隊興安街の東半分(自営業者、会社員) ※1,200名
- ▶ [3班:興安街近傍の開拓農民 (東京荏原開拓団：武蔵小山商店街1,039名 8/17虐殺、及び仁義佛立講開拓団)]

ソ連の満洲侵攻（歴史的経過）

- ▶ 1941年4月13日 日ソ中立条約締結・・・日ソ相互に領土の保全および不侵略を約束し、締約国の一方が第三国から攻撃された場合は他方は中立を維持することを約した。有効期限は5年とされ、満期の1年前に締約国の一方から破棄の通告がなければさらに5年間延長。
- ▶ 1945年4月5日 ソ連が日ソ中立条約を延長しないと通告・・・モロトフ外相がモスクワ駐在の佐藤尚武大使をクレムリンに呼び、日ソ中立条約は1年後に期限が切れるが延長しない方針であると伝えた。佐藤尚武大使はこの「不延長」の申し入れは事実上の「破棄」を意味していると見た。
- ▶ 1945年7月26日 ポツダム宣言・・・日本への無条件降伏の勧告であるポツダム宣言が出された。ポツダム宣言にはソ連は日ソ中立条約があって日本に宣戦していなかったため参加せず、中国の蒋介石の同意を得て、その名前を加えて発表した。日本政府はソ連の侵攻が秋頃と予測していたが、戦後の満洲での影響力を保つため、開拓民を在留させることとした。
- ▶ 1945年8月8日 ソ連が対日宣戦布告・・・日ソ中立条約を破棄し、対日宣戦布告を行い、翌9日、一斉に150万の軍が国境を越えて満洲に進撃した。8月10日、軍部は「関東軍は朝鮮を防衛せよ。満洲は放棄も可」という命令を下した。 [終]

このあとは、大島さんの講演当日、大島さんが語ったことを述べます。